岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第　第7号（1997）pp.185－203

ホーソーン「天国鉄道」の教材化

―― 可能性と補助教材 ――

星　野　勝　利*

(1996年12月9日受理)

Katsutoshi　HOSHINO

Textualization of Hawthorne's "The Celestial Railroad":
Relevancy and Supplementary Teaching Materials

はじめに

外国文学の作品を一定の期間で学ぶことを主眼とする授業を行う場合，とりあげるべき作品（教材・テキスト）はどのようなものがよいであろうか。内容や形式，文化や歴史との関係、ことばの問題，量の問題、履修者との関係等に応じて，適切妥当なものがあると思われる。

アメリカ文学について主として学ぶ授業で，その授業の眼目を仮に次のような点に置くとする。

①特定の一つの作品を原文で読む。
②講義あるいは講読形式で授業を行う。
③関連事項について可能な限り学ぶ。
④英語の学習に配慮する。
⑤履修者の関心に配慮する。

このような目標のもと，たとえば19世紀アメリカの作家ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne，1804-64）の文学について学ぶとする。その場合，数あるその作品の中で，教材(テキスト)としてはたしてどの作品を選択することが可能であろうか。またそれをテキストとする場合,それを通して,どのようなコンテキスト，すなわち文学的・文化的・歴史的環境等を学ぶことが可能であろうか。またその際，授業を有効に進めるための補助教材として，たとえばどのようなものを活用することが可能であろうか。

以上のような視点から、ホーソーンの作品「天国鉄道」（"The Celestial Railroad," *Mosses from an Old Manse,* 1846）を取り上げ，その教材としての可能性と利用可能と思われる補助教材について検討してみたい。

＊岩手大学教育学部

1 何を選ぶか

19世紀アメリカ文学について学ぶ場合，学ぶべき作家，作品，項目等は，数多く指摘することができる。作家に限ってみた場合でも，たとえばエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)，ソーロー(Henry David Thoreau, 1817-62)，ポー(Edgar Allan Poe, 1809-49)，ホーソーン，メルヴィル(Herman Melville, 1819-91)，ホイットマン(Walt Whitman, 1819-92)，ディキンソン(Emily Dickinson,1830-86)，マーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910) など，基本的な知識として学んでおきたい作家の名前は数多く浮かんでくる。

これらの基本的な知識・情報は，一般的には「文学史」や「概論」関係の科目で学ぶ。しかしこれらの作家の中の特定の一人，あるいはその特定の一人の特定の作品について学ぶ場合，一般的にその授業科目は「特殊講義（特講)」のそれということになる。「特殊」とは，もちろん「普遍」に対応するものであり，「ある部類のものの全部に共通するものではなく，そのうちの一部についてだけあてはまる性質」(『角川国語中辞典』) である。「文学史」や「概論」がここにいう「全部に共通するもの」に関わる科目とすれば，一人の作家，一人の作品について，限定的に，狭く，かつ深く学ぶための科目は，「普遍」よりも「特殊」に傾斜した「特殊講義」のそれということになる。

このような科目でいまホーソーンの文学について学ぶとする。その際，ある特定の作品をテキストとし，それを通して，そのコンテキストについても学び，またその媒体としての英語や，テキストに対する履修者の関心にも配慮するとする。そのようなテキストとして，はたしてどのような作品を選ぶことが有効であろうか。

このような目標に照らした場合，代表的作品である『緋文字』(*The Scarlet Letter,* 1850) や『七破風の家』(*The House of the Seven Gables,* 1851) は，テキストとして適切なものとは思われない。作品全体を「原文で読む」という目標に照らした場合，これらの作品はどうみても長すぎるのである。この場合「読む」とは，テキスト中のすべての文を読むということ，すなわち文の意味を考え，関連事項を学びながら，すべてを読むということである。このような読みは，授業者の立場から見ればいわゆる「講読」のそれということになるであろうが，このような読みのためには，これらの作品は量的に限度を越えていると思われるのである。

もちろん読み方によっては，可能性がないわけではない。かなりの量の予習を毎週履修者に求め，それを前提に授業を進めるという方法も考えられる。しかしこれはその程度が問題である。履修者の中には，毎日3科目あるいは4科目履修している者がいる可能性があり，そのような履修者の場合，与えられた課題を毎週確実に処理することがかなり困難なことになることが，ある程度予想できる。その上，英文を原文で読むという作業は，それなりの困難な事情を抱えている。日本文を読むのとは異なり，読み進むためにはかなりの時間が物理的に要求されるのが普通である。加えて，ホーソーンの場合，その文章は読みやすい部類のものではない。修辞性の高い，屈折した，いかにも19世紀的な文体は，読み慣れないと読み解くのにかなりの労力を要するものである。もちろん翻訳を利用するということも考えられる。しかしこれは，本授業の目指すところではない。原文を直接学ぶ

というのが，この授業の大きな目標である。

このような目標に照らした場合，望ましい作品はとりあえず短編ということになる。短編であれば，原文で作品全部を読むとしても，読み切れる可能性は十分にある。また読みに要する時間以外の時間を，コンテキスト等の講義に利用できる可能性もある。このような作品として，はたしてどのような短編が考えられるであろうか。

ホーソーンは長編小説4編のほかに，スケッチ(sketch)やテール(tale)と呼ばれる短い作品を数多く残している。その中には，ニューイングランドの歴史をテーマとした一連の作品や，人間の心の罪の問題を取りあげた作品，あるいは科学や近代の都市文明について描いた作品などがある。また児童向けに書かれた作品も少なくない。

これらの作品の中には，代表作『緋文字』と内容的に重なり合う部分を持つ作品も少なくない。「牧師の黒いヴェール」(“The Minister's Black Veil”) や「ヤング・グッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”) あるいは「エンディコットとレッド・クロス」(“Endicott and the Red Cross”) などは，その例である。これらの作品は，『緋文字』と同様に，植民地時代のアメリカ東部，すなわちニューイングランド地方を舞台とし，その歴史や文化，とりわけその宗教的背景をその素材とする。したがって，これらの作品を教材とする場合，それを通して，代表作としての『緋文字』の世界を間接的に学ぶことができ，また植民地時代の宗教的・文化的背景などについても，広く学ぶことができる。この意味ではこれらの作品は，原文に直接触れながらホーソーン文学やニューイングランドの文化や歴史を学ぶ教材として，いずれもきわめて魅力的なものである。

しかし，作品に付随することをより多く学び，また作品に対する関心をより強く換起する可能性があるという点で，これらの作品よりも望ましいと思われるものがある。「天国鉄道」(“The Celestial Railroad”)である。

2 「天国鉄道」とは

『緋文字』で代表される作家ホーソーンは，ニューイングランドの過去の世界に目を向けた作家としてとらえられがちである。事実そのような内容を持つ作品が少なくない。先に触れた「エンディコットとレッド・クロス」や「メリーマウントのメイポール」(“The Maypole of Merrymount”)などは，いずれもニューイングランドの過去を素材とするものである。しかしホーソーンは，同時代としての19世紀の社会の現実にも敏感な反応を示した作家である。『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance,* 1852) は，当時ホーソーンが自ら体験した実験農場での先進的試みを素材としたロマンスであり，『七破風の家』も、内容的にはなるほど先祖の罪の問題を扱ってはいるが，物語の舞台は，汽車が走り，銀板写真 (daguereotype) が普及している同時代としての19世紀ニューイングランドである。

「天国鉄道」が教材として魅力ある理由の一つは，作品の持つこの同時代性である。この作品の場合，この同時代性を示すのは，題目にも見られる「鉄道」である。イギリスに始まる鉄道文明が新世界アメリカ，とりわけ東部社会で急速に普及し始めたのは，19世紀前半の1830年代である。この作品は急激に変動するこの時期のアメリカ東部を舞台とする。[1] しかも「鉄道」普及に代表される社会の変動そのものが作品の中心テーマである。

作品の内容は，「破滅の町」(The City of Destruction)という名前の町を夢の中で訪れた「わたし」(語り手) が，「天国の町」(The Celestial City)との間に最近敷設されたという「鉄道」に，案内人とともに乗り込み，目的地である「天国の町」に向かって旅をするというものである。したがってこの作品は，一種の夢物語であり，荒唐無稽な旅行記である。しかしこの世界は同時に，「鉄道」が普及しつつあった当時の社会的状況と，それに対する作者ホーソーンの視点のありかを垣間見させるものである。外国文学を学ぶ場合，作品のストーリーやプロット，文体や技巧，作者の人物像等を辿ることももちろん重要である。しかし，その作品をトータルに理解するためには，作品のもつ文化的・歴史的背景等を十分に知ることも重要なことである。

「天国鉄道」の持つもう一つの魅力は，文学作品としての指示範囲のひろさ，あるいは他の文学作品との関連性の深さというべきものである。この作品の場合，これを媒介として，他の文学作品，それも広くイギリス，ヨーロッパ，さらには日本の文学さえ連想させるものを内在させているということである。これはたとえば作品冒頭の次のような文に認められるものである。

① Not a great while ago, passing through the gate of dreams, I visited that region of the earth in which lies the famous City of Destruction. It interested me much to learn that by the public spirit of some of the inhabitants a railroad has recently been established between this populous and flourishing town and the Celestial City.[2)]
(それほど昔のことではないが，夢の中でわたしは「破滅の町」があるあの場所を訪れた。そこで知ったことは，よく気の利く町民のおかげで最近鉄道なるものがひかれ，にぎやかで活気に満ちたこの町と「天国の町」が結ばれているということであった。)

② The reader of John Bunyan will be glad to know that Christian's old friend Evangelin, who was accustomed to supply each pilgrim with a mystic roll, now presides at the ticket office.[3)]
(ジョン・バニヤンの本を読んだことのある人はこれをを聞くとうれしくなるにちがいないが，クリスチャンの友だちでかつて秘密のまきものを巡礼の人に手渡していたエヴァンジェリンが，いまでは切符係をしているのであった。)

これら二つの文からわかるように，「破滅の町」から「天国の町」へと向かうこの夢の旅路は，実は17世紀イギリスの作家ジョン・バニヤン (John Bunyan, 1628- 88) が，その著書『天路歴程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678)で描いた巡礼の旅路を下敷きにしたものである。『天路歴程』は，「破滅の町」の住人である主人公クリスチャンが，生きる目的を見失い，ある日突然，真の生活を求めて，妻を捨て，家族を捨てて，「天国の町」へ旅立つ，という物語である。バニヤンのこの作品は，聖書に次いでよく読まれたといわれるほど広く知られた作品であるが，[4)]上記のことばから明らかなように，夢の中で「天国の町」へと向かうこの作品「天国鉄道」の汽車の旅は，実は17世紀の作品に対する19世紀版パロディ（もじり）という性格を持つものなのである。

パロディである以上，それを学ぶためには，パロディの対象となった元の作品について

学んでおく必要がある。少なくともそれについての基礎的事項を確認しておく必要がある。もちろん『天路歴程』は「英文学史」の中での必修事項であり，文学史を履修したものは既にある程度の知識を得ていると思われるものである。しかし著名な古典的作品を学ぶことは，既修事項にせよ初修事項にせよ，有益であることに変わりはないはずである。

そればかりではない。『天路歴程』という作品は，内容的には一種の巡礼物語の範疇に入るものである。巡礼物語という点では，同じく古典的な作品であるチョーサー(Geoffrey Chaucer，1343?-1400)の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales,* 1387-1400)とのつながりも指摘できる。チョーサーの物語は，「天国」へ向かうものではなく，カンタベリーの大聖堂に向かう旅である。しかし「大聖堂」に向かうことは，比喩的に見れば，つまりは「天国」に向かうことと同義となるものであろうから，その途上で巡礼者たちによって次々と提供されるさまざまな物語は，やはり巡礼物語の枠の中で理解することができる。とすれば，「天国鉄道」を通して，『カンタベリー物語』についても学ぶ機会が得られることになる。

「天国」への旅という点に注目すれば，ダンテ（Dante Alighieri,1265-1321)の『神曲』(*The Divine Comedy,* 1309?-1320?)との関連を指摘することも可能である。知られるように『神曲』は，人生半ばにして暗い森で道に迷ったダンテが，詩人ヴァージル（ウェルギリウス）や恋人ベアトリーチェに導かれて，地獄・煉獄・天国の三界を遍歴する物語である。一週間で辿られるこの遍歴の旅路は，「天国」（至高天）を目指す旅でもある。したがって，これも一種の巡礼文学と見ることも可能であり，だとすれば，「天国鉄道」を通して学ぶべき世界は，バニヤンやチョーサーのイギリスのそれを越えて，ヨーロッパ中世の世界へ，イタリア文学の世界へと拡大することにもなる。

加えて，夢の世界を旅する「天国鉄道」の「わたし」が最後に夢より目覚め日常の世界に帰還するという構図に注目すれば，ギリシャ神話のオルフェウス物語との関連を指摘することも可能ではないか。夢の世界から帰還する「わたし」の歩みは，蛇に咬まれて他界した妻エウリュディケの姿を求めて日常世界と異界（冥界）とを往還するオルフェウスの歩みと無関係のものではないと思われる。この点も含めるならば，作品「天国鉄道」の共通性の射程は，中世イタリアを越えて，遠くギリシャ・ローマの神話の世界にまで拡大することになる。

共通性という点で，もう一つ注目したいことがある。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』との共通性である。[5]「天国鉄道」が欧米の古典を想起させる内容を持つことは上に見た通りである。このような内質を持つ作品が，欧米のそればかりでなく，われわれ自身のごく身近な作品を想起させるものも持っているとすれば，履修生の興味や関心を喚起するという点で，大きな意味を持つといえるのではないか。

「天国鉄道」と『銀河鉄道の夜』の共通性は，いくつか指摘できる。第一は，もちろん「鉄道」というモチーフに関わるものである。いずれも「天」に関わる「鉄道」が物語の土台となっているばかりでなく，いずれの作品も「鉄道」をめぐる社会的コンテキストを背景とするものである。1840年代に執筆された「天国鉄道」は，1830年代を中心としたアメリカ東部の急激な鉄道化を背景としているのに対し，『銀河鉄道の夜』もまた「軽便鉄道」という社会的背景（「ほんたうにジョヴァンニは，夜の軽便鉄道の小さな黄色の電灯のならんだ車室に，窓から外を見ながら座ってゐたのです」）の中で創作されているという点

である。[6]作品双方の事情は，この点で極めて類似していると思われる。

第二は，「夢」である。「天国鉄道」は，先にみたように，「夢」で始まる。結びも同様である。終着駅についた「わたし」は，同行者に更に先の「天国」まで同行を求めるが，驚いたことにその友は，突然口や鼻から炎を吹き出す。その瞬間気付いたのが，「何と夢だったのか」[7]ということであった。すなわち「夢」に始まる作品は，「夢」によって見事に完結するのである。

このような夢の世界は，『銀河鉄道の夜』でも同様である。丘の上で寝転んだジョバンニは，「銀河ステーション、銀河ステーション」[8]という声を聞く。これを契機に銀河鉄道の旅を始めたジョバンニは，天の川の大きな真っ暗な穴を見たあと，隣のカムパネルラに話しかける。しかしカムパネルラの姿が見えないためジョバンニは激しく泣き出すが，すると「ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむってゐた」[9]のである。つまり銀河の旅は「天国鉄道」のそれと同様，すべて夢の中のことであったのである。

第三は，宗教性とりわけそのキリスト教的な性格である。「天国鉄道」の「わたし」の旅はもちろんキリスト教的なものである。ジョバンニとカムパネルラの旅もじつはキリスト教的な性格がきわめて濃いものである。後述するように，ジョバンニとカムパネルラは旅の途中で「十字架」を窓の外に二度見る。そのような旅の中で二人が交わす対話は，二人の旅が極めて宗教的なものであること，しかも「天国」と関わるようなものであることを，十分に示唆する。二人の目の前には「天上」の世界が広がっている。

> 「僕もうあんな大きな暗の中だってこはくない。きっとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」
>
> 「あゝきっと行くよ。あゝ，あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あっあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。」[10]

このような共通性に注目すれば，「天国鉄道」を通して『銀河鉄道の夜』に触れることは，決して無意味なことではないと思われる。一見無関係と思われる作品をコンテキストとして理解することにより，テキストそのものの理解がより深まる可能性も期待できる。

ところで、関連して注目したいのは，二つの作品の間に見られる差異，とりわけ表現形式上のそれである。これについて学ぶことは，文学の表現形式に関わる基本的事項を学ぶためのよい機会になると思われる。先に見たように，「天国鉄道」は『天路歴程』の「パロディ」である。その『天路歴程』はいわゆる「アレゴリー」の形式で書かれた作品である。「クリスチャン」という名前の主人公や，「破滅の町」という名前の町は，その文字（表現）に示された意味を明白に内在させたものであり，いわゆる「寓意」である。またその際用いられる「夢」の構造は，責任回避のための便利な方法として中世でよく用いられた表現方法であり，修辞学的には一種の「パリノウド（取り消しの詩法）」[11]というべきものである。「天国鉄道」と『天路歴程』からは，少なくともこのようなことを学ぶことができる。

『銀河鉄道の夜』は，これらの作品とはまた異なる表現方法を持つ。「燐光の三角標」「プリオシン海岸」「鳥を捕る人」「インデアン」「蝎の火」 ── これらはいずれも一見寓意的に見えるものである。しかしこれらは，「天国鉄道」や『天路歴程』のそれとは異なり，

一定の意味に明確に集約されることを拒否するような性格が極めて濃いものである。つまり「寓意」よりも「象徴」に大きく傾斜した表現形式ということになるが，作品間に認められるこのような差異を通すことによって，「アレゴリー（寓意）」や「シンボル（象徴）」といった表現形式に関わる基礎的概念を学ぶことも可能となるだろう。

すなわち「天国鉄道」は，以上見たように，多様な世界をそのコンテキストとして提示できる可能性を豊かに内在させた作品（テキスト）なのである。

3 補助教材

「天国鉄道」を教材として選び，実際に授業を行う場合，作品の読みの作業に進む前に基礎的情報を提示しておく必要がある。この情報は講義の一環として口頭で与えることも可能であろうし，資料を通して提示することも可能だろう。履修上の便宜という点から見れば，資料の活用が望ましいと思われるが，その場合，英語の学習という基本的目標も視野に含むものとして，どのようなものをどの程度提示することが望ましいであろうか。

「天国鉄道」を学ぶ場合，まず学ばなければならないのは，作者ホーソーン自身のことである。これは基本的には「文学史」で学ぶべき事項であるが，受講生の中には既に文学史を履修しホーソーンについてある程度の知識を持つものも含まれていると予想される。そのような状況のもとで改めてホーソーンについて紹介する場合，くわしい資料を提供するという方法と，資料は基本的なものにとどめ，くわしい部分については必要に応じて講義で補うという方法が考えられる。しかしこの授業は，作家について学ぶよりもむしろ作品について学ぶことに重点を置くものであり，この点を考慮すれば，資料自体はごく簡素なもので足りると考えられる。そのような資料は数多く見いだすことができるが，教室で使用するテキスト（原文）として格好のものの一つと考えられるポータブル版『ホーソーン選集』（*The Portable Hawthorne,* Penguin）にそれを捜すことも可能である。たとえば巻頭に掲載されている次のような紹介文は，作家ホーソーンについての基礎的情報をコンパクトに伝えてくれるものである。

Nathaniel Hawthorne (1804- 1864) was born in Salem, Massachusetts, where, after his graduation from Bowdoin College in Maine, he wrote the bulk of his masterful stories of American colonial history, many of which were collected in his *Twice-Told Tales* (1837). In 1839 and 1840 Hawthorne worked in the Boston Customs House, then spent most of 1841 at the experimental community of Brook Farm. After his marriage to Sophia Peabody, he settled in the "Old Manse" in Concord; there, between 1842 and 1845, he wrote most of the tales gathered in *Mosses from an Old Manse* (1846). His career as a novelist began with *The Scarlet Letter* (1850), whose famous preface recalls his 1846-1849 service in "The Custom-House" of Salem. *The House of the Seven Gables* (1851) and *The Blithedale Romance* (1852) followed in rapid succession. After a third political appointment — this time as American Consul in Liverpool, England, from 1853 to 1857 — Hawthorne published *The Marble Faun* (1860).

同じくこのテキストの裏表紙に掲載されている次のような解説文は，作品講読に入る前の学習資料としても十分意味のあるものだろう。やや難解な英文ではあるが，アメリカ文学の中でのホーソーンの位置付け，アメリカに対するホーソーンの視点，作品の持つ意味等について，簡潔ではあるが十分に示唆的である。

> Nathaniel Hawthorne is, alongside Poe, the darkest of American writers. More than anyone, he articulates the American underself, the strains of guilt, dread, and loneliness that our public culture so vigorously denies. His characters are haunted and solitary, isolated by a sense of sin as ineradicable as a birthmark. In Hawthorne's mythology of this country's Puritan past, everyone is compromised and none more so than the guardians of communal virtue.

ホーソーンの資料に次いで必要なのは，「天国鉄道」の基礎となる作品『天路歴程』とその作者バニヤンについての基礎的資料である。バニヤンについては，一般的には「英文学史」で学ぶ。しかし，市販の文学辞典（和文）の次のような情報は，「天国鉄道」を読むための基礎的資料を十分に提供してくれる。これを通して，バニヤンの人となり，『天路歴程』の概略，主人公のこと，構成のことなど，作者・作品の双方についてその大略を知ることができる。

> ジョン・バニヤン(1628-88)　イギリスの宗教作家、牧師。ベッドフォードの片田舎の鋳掛屋に生れ，早くから家業を継いだ。内乱には議会軍に徴集され，除隊後，48年ごろ結婚した最初の妻の感化から信仰に導かれ，熱心なバプティストとなった。自伝『あふれる恩寵』(66) はこの間の霊的苦闘を記録したもの。やがて教会の説教壇に立つようになったが，60年，王政復古に際し，免許なしに説教したかどで投獄され，以後12年間，獄中にあって，前記自伝や『聖なる都』(65) などを著した。釈放後、免許を得てベッドフォード教会の牧師に選ばれ，各地を説教して歩いたが，75年，再び投獄，この6ケ月の獄中で，彼の最大傑作『天路歴程』(2部，78・84) の第1部が書かれた。第1部は主人公クリスチャンが神の火による滅亡から救われ，種々の困難にたえて天国に至るまでを，第2部は妻クリスチティアーナが夫の後を追い，救いに至る道ゆきが書いてある。これは人間内奥の問題を寓意物語にのせて形象化したところに特徴があり，変化にとむ性格描写と，簡潔にして力強い明晰な文体は，イギリス小説の成立に大きな影響を与えた。ほかに，寓意物語『悪太郎の一生』(80)『聖なる戦い』(82) など。[12]

基本的な資料としては，以上の二点であるいは十分かもしれない。しかし「天国鉄道」をより深く理解するためには，この作品および『天路歴程』に共通するプロット（筋）の性格，その本質的な意味について，理解しておく必要があるだろう。これについての理解が欠落すると，作品「天国鉄道」についての理解も覚束なくなる可能性がある。

そこで重要なのは，「天路歴程(Pilgrim's Progress)」ということばの意味，およびその背景を十分に理解しておくことだろう。

「天路歴程」とは，天国への道を歩むこと、すなわち天国への巡礼の旅の意味である。

これはキリスト教の天国観，巡礼観と深く関連するものであるが，これについては聖書を資料として学ぶことが可能である。たとえば次の引用にあるように，「ヘブル人への手紙」には「天国(heaven)」や「都(city)」や「旅人(strangers)」や「寄留者(pilgrim)」について触れた部分があり，これを学んでおくことは，キリスト教の天国の概念，巡礼の概念について，ごく基礎的なことを学ぶことにもなると思われる。また聖書を影響力の大きい一個の古典として，あるいは一個の文学作品として読む契機にもなると思われる。加えて，たとえば英文訳（欽定訳）と日本語訳（現代語訳）の双方の資料を同時に提示し，比較しつつ読むとすれば，聖書テキストをめぐる翻訳の問題，とりわけ英語文化圏において歴史的に大きな役割を果たしてきた欽定訳聖書（Authorized Version）の問題等について付随的に学ぶことも可能になると思われる。

> These all died in faith, not having received the promises, but having seen them afar off, and were persuaded of them, and embraced them, and confessed that they were *strangers* and *pilgrims* on the earth. For they that say such things declare plainly that they seek a country. And truly, if they had been mindful of that country from whence they came out, they might have had opportunity to have returned. But now they desire *a better country,* that is, an heavenly: wherefore God is not ashamed to be called their God: for he hath prepared for them *a city.* (*Hebrews,* My italics)[13]

> これらの人はみな，信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが，はるかにそれを望み見て喜び，そして，地上では〈旅人〉であり〈寄留者〉であることを，自ら言いあらわした。そういいあらわすことによって，彼らがふるさとを求めていることを示している。もしその出てきたところのことを考えていたなら，帰る機会はあったであろう。しかし実際，彼らが望んでいたのは，もっとよい，〈天〉にあるふるさとであった。だから神は，彼らの神と呼ばれても，それを恥とされなかった。事実，神は彼らのために，〈都〉を用意されていたのである。(「ヘブル人への手紙」強調引用者)[14]

英訳資料という点では，ダンテの『神曲』のそれも魅力的である。『神曲』と「天国鉄道」は先に見たように内容的にまったく無関係のものとは思われないが，英訳版『神曲』は学生にもそれほど無理なく読めると思われるものであり，その書き出し部分だけでも英語で読むことは，大作『神曲』の一端に触れる良い機会になると思われる。次の引用に見られるように，原詩の形式を忠実に踏襲して「テルツァ・リマ（三行韻詩）」の形式で訳されたこの冒頭部は，雄渾なこの物語詩（narrative poetry）の世界の一端を十分に伝えてくれるものである。また，「人生半ばにして／暗い森の中に自分はいた」という書き出し部分は，『天路歴程』のクリスチャンの姿を容易に喚起させるものであるし，加えて，「眠気に誘われていた自分」が「気づいたら丘のふもとにいた」という設定は，「天国鉄道」の世界や『銀河鉄道の夜』のジョバンニの世界とも重なるものがあることを教えてくれるはずである。

Midway along the journey of our life
I woke to find myself in a dark wood,
for I had wandered off from the straight path.

How I entered there I cannot truly say,
I had become so sleepy at the moment
when I first strayed, leaving the path of truth,

but when I found myself at the foot of a hill,
at the edge of the wood's beginning, down in the valley,
where I first felt my heart plunged deep in fear,

I raised my head and saw the hilltop shawled
in morning rays of light sent from the planet
that leads men straight ahead on every road.[15)]

「天国鉄道」を読むために必要な基礎的情報と考えられるのは，およそ以上のようなものである。もちろん情報は，多ければ多いほどよい。授業内容はそれだけ質の高いものとなる可能性がある。しかし提示される情報は，あくまでも「天国鉄道」学習のために，基礎となり，予備となるべきものである。授業の中心は，作品そのものを原文で直接読むことであり，その原文の読みを通して，作品を相対的により深く学ぶことである。そのためには，おのずと時間的制約も生じることになる。したがって以上提示した資料は，「天国鉄道」を読むための十分な資料というものではなく，あくまでも必要最低限の学習資料というべきものである。

だが，それでは作品「天国鉄道」は，現実にどのように講じられるのが望ましいのであろうか。講義の過程，講読の過程で，とりわけどのような事項が注目されるべきであろうか。

4 重点項目

講読形式で作品を読む場合，「講」の問題と同様に「読」のそれも重要である。原文を直接読むことを大きな目標とする場合，この重要性はさらに増す。読み進めるためには，内容（文意）についての履修者の理解度が問題となる。平易な文章の場合，これは大きな問題とはならない。意味の把握はほとんど前提条件と考えられるからである。しかし英文自体がある程度の難しさを持つものである場合，文の内容や，場合によっては構文や文法事項についての説明が，どうしても必要になる。これが欠落すると，内容把握という点で履修者の側に不満の残る可能性がある。また現実にテキストを読み進めていく場合，文意の十分な理解なしに「講」に走ることは，英語の学習も兼ねるという当初の目標から逸れることにもなる。

「天国鉄道」の場合，文意の把握にかなり比重をかける必要がある。全体的に見て，文の構造自体が平易なものとは思われないからである。このことは以下に引用した作品冒頭

部の2つの文にもある程度見てとれるだろう。語彙の問題はさておき，比較構文，挿入語句，倒置語法等を多用する文体は，かなり屈折したものであり，ごく自然に読み進められる種類のものとは思われない。読みの熟練がある程度必要と思われるものであり，履修者全体にこれを前提条件として期待するのは，経験的にみて難しいと思われる。したがって，ある程度時間をかけた文意の説明が，この作品を読む場合不可欠な作業と考えられる。

① It was my good fortune to enjoy the company of a gentleman－one Mr. Smooth-it-away－who, though he had never actually visited the Celestial City, yet seemed as well acquainted with its laws, customs, policy, and statistics, as with those of the City of Destruction, of which he was a native townsman. [16]

② On both sides lay an extensive quagmire, which could not have been more disagreeable, either to sight or smell, had all the kennels of the earth emptied their pollution there.[17]

この点を第一の留意点とすれば，第二の留意点は，読みの作業の中で講ずべき事項を，あらかじめ整理し，確認しておくことだろう。その際，提示すべき関連資料があれば，事前にそれを整理しておくことが望ましいであろうが，このようなものとしてまず必要になるのは，表現形式にかかわるものではないか。

先に見たように，作品冒頭第一文には「よく知られた破滅の町（the famous City of Destruction）」ということばが出てくる。「よく知られた(famous)」ということばは，この作品がバニヤンの作品の「パロディ」であることを明確に示すものである。「天国鉄道」を読む場合，このことは作品の本質にかかわる極めて重要なことであり，関連する「アレゴリー」や「シンボル」などの言葉とともに，説明を省略することのできないものである。したがって，何らかの資料を用いて，できるだけ具体的に，分かりやすく説明する必要があると思われるが，たとえば次のように，「パロディ」「アレゴリー」「シンボル」という三つのことばのごく簡潔な定義を，英語で提示するというのはどうであろうか。もちろん他にも提示すべきことばがないわけではないが，またこのような定義はそれぞれのことばの意味をすべて尽くしているわけでもないが，不足の点については必要に応じて口頭で補足することが可能であり，また英語の定義の学習という点からみても無意味ではないと思われる。

parody : a literary work in which the style of an author is closely imitated for comic effect or ridicule.

allegory : a more or less symbolic fictional narrative that conveys a secondary meaning (or meanings) not explicitly set forth in the literal narrative. It encompasses such forms as fable, parable, and apologue and may involve either a literary or an interpretative process.

symbol : something that stands for or suggests something else by reason of relationship, association, convention, or accidental resemblance; especially, a visible sign

of something invisible (for example, the lion is a symbol of courage and the cross is a symbol of Christianity).[18]

この定義によれば，パロディとは，「わらい(comic effect)」や「からかい(ridicule)」を狙いとしたある作品の「模倣(imitation)」である。この模倣の対象となるのが『天路歴程』のアレゴリーである。『天路歴程』のアレゴリーは，人物名や地名などで多様な使われ方をするが，たとえば人物名でみるならば，「クリスチャン(Christian)」という主人公が，道中で「伝道者」(Evangelist)や「柔順者」(Pliable)や「助力者」(Help)や「信仰者」(Faithful)などに出会うという具合である。いずれの人物も名前からしていかにも寓意的であるが，「天国鉄道」ではこれらがパロディ化される。たとえば語り手の道連れになるのは「円滑氏(Mr. Smooth-it-away)」という具合である。この名前など，線路を走る汽車の旅の道連れとして，また時代の差，巡礼の質の差を如実に示すものとして，いかにも言いえて妙である。このようなパロディが作中では頻出することになるが，授業者としては，たとえば下に示すよう全体的な見取り図をあらかじめ整理しておく必要がある。場合によっては，履修者の便宜のため，またパロディ総体を把握する一助として，事前にこれを提示することも考えられる。

〈パロディ化された人物・地名等一覧〉

地名等

the City of Destruction
the Celestial City
the Slaugh of Despond
the Valley of Humiliation
the Interpreter's House
the Cross
the town of Shun-repentance
Habits
the Hill Difficulty
the Palace Beautiful
the Valley of the Shadow of Death
the city of Vanity
Conscience
the Delectable Mountains
the pleasant land of Beula
the Enchanted Ground
the Dark Valley

人名等

Mr. Smooth-it-away
Christian
Evangelist
Prince Beelzebub
Mr. Greatheart
Apollyon
Mr. Live-for-the-world
Mr. Hide-sin-in-the-heart
Mr. Scaly-conscience
Giant Transcendentalist
Faithful
Rev. Mr. Shallow-deep
Rev. Mr. Stumble-at-truth
Rev. Mr. This-to-day
Rev. Mr. That-to-morrow
Rev. Mr. Bewilderment
Rev. Mr. Clog-the-spirit
Rev. Mr. Wind-of-doctrine

Miss Prudence	Stick to-the-right
Miss Piety	Mr. Foot-it-heaven
Miss Charity	Demas
Take-it-easy	Lot's wife
Pope	Giant Despair
Pagan	Mr. Flimsy-faith

パロディが氾濫する「天国鉄道」の世界は，先の定義にあるように，基本的に「わらい」と「からかい」の世界である。このような場面は枚挙にいとまがない。橋梁を補強するためプラトンや孔子やドイツやフランスの哲学書を投げこんだ「落胆の沼(Slaugh of Despond)」，機関士となった大悪魔アポリオン，そのアポリオンが昔風に徒歩で天国へ向かう巡礼たちに汽車の蒸気を吹きかけてからかうその行為，老婆と化したかつての美しい娘たち，口や鼻から火をふく地獄谷の労働者たちなど，いずれも「わらい」と「からかい」の世界である。

中でも注目したいのは，窓の外に見えたという「巨大な超越主義者(Giant Transcendentalist)」の存在である。この「超越主義者」は，実はその名前からして，あるいは語られている内容からみて，当時ボストンを中心にして「超越主義」の哲学運動を主宰していたエマソンを指すことは明白である。したがってこの部分は，当時の知的指導者としてのエマソンに対するパロディとして読むことができるのであり，当時の文学・文化・思想等の世界に対するホーソーンの視点を読むこともできるのである。したがってここは，このことについて単に講じるだけでなく，たとえば履修者にこの部分の日本語訳を求めるなど，慎重に読むことが望まれるところである。

> At the end of the valley, as John Bunyan mentions, is a cavern, where, in his days, dwelt two cruel giants, Pope and Pagan, who had strewn the ground about their residence with the bones of slaughtered pilgrims. These vile old troglodytes are no longer there; but into their deserted cave another terrible giant has thrust himself, and makes it his business to seize upon honest travellers and fatten them for his table with plentiful meals of smoke, mist, moonshine, raw potatoes, and sawdust. He is a German by birth, and is called Giant Transcendentalist; but as to his form, his features, his substance, and his nature generally, it is the chief peculiarity of this huge miscreant that neither he for himself, nor anybody for him, has ever been able to describe them. As we rushed by the cavern's mouth we caught a hasty glimpse of him, looking somewhat like an ill proportioned figure, but considerably more like a heap of fog and duskiness. He shouted after us, but in so strange a phraeseology that we knew not what he meant, nor whether to be encouraged or affrighted.[19]

窓の外に現れる世界でもう一つ注目したいのは，「十字架(Cross)」である。「わたし」が汽車の窓の外に見た「十字架」である。この「十字架」は『天路歴程』でもでてくる。これをみたクリスチャンが背負った重荷を肩から落としたとされているものであるが、[20]

「天国鉄道」では乗客たちが荷物を客車に預けているためクリスチャンとちがってそれを落とさなくてすんだとされているものである。

ところが「十字架」は,『銀河鉄道の夜』とも無関係ではない。賢治が「天国鉄道」や『天路歴程』に出てくる十字架の場面を熟知していたかどうかはわからない。しかし『銀河鉄道の夜』の次のような場面は,少なくともこの作品とキリスト教との深いつながりを示唆するものである。また,きわめてキリスト教的な作品である「天国鉄道」や『天路歴程』との関連性をも連想させるものである。

① 俄かに,車のなかが,ぱっと白く明るくなりました。見ると,もうじつに,金剛石は声もなくかたちもなく流れ,その流れのまん中に,ぼうっと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに,りっぱな眼もさめるやうな,白い十字架がたって,それはもう凍った北極の雲で鋳たといったらいゝか,すきっとした金色の円光をいただいて,しづかに永久に立ってゐるのでした。

「ハルレヤ,ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかへって見ると,車室の中の旅人たちは,みなまっすぐにきもののひだを垂れ,黒いバイブルを胸にあてたり,水晶の珠数をかけたり,どの人もつつましく指を組み合せて,そっちに祈ってゐるのでした。思はず二人もまっすぐ立ち上がりました。カムパネルラの頬は,まるで熟した苹果のあかしのやうにうつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは,だんだんうしろの方へうつって行きました。[21]

② あゝそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木といふ風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲が丸い環になって後光のやうにかかってゐるのでした。(中略)

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひゞきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとほった何とも云へずさはやかなラッパの音をききました。(中略)

そして見てゐるとみんなはつゝましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいてゐました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきものの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。[22]

他の作品との関連性という点では,「光」の場面も注目したいところである。これは,かつての「死の影の谷(the Valley of the Shadow of Death)」が,今ではガス灯という人工の光りで照らされていることが語られる場面である。その際語り手は,「こうして輝く光は谷に永遠に漂う硫黄の燃える炎からつくられた ── しかしこの光は友達の顔に現れた表情から見ると,目には悪く,迷惑な光でもあるようだ。この点では,この光と自然の光を比べてみれば,真実と虚偽の違いと同じ違いがある」[23]と述べている。

ここで注目したいのは,「光」が,「自然の光」と「人工の光」の二つに区分され,かつそれが「真実」と「虚偽」の対応関係でとらえられていることである。もちろんこのような「光」の見方は,「洞窟の比喩」としてよく知られるプラトンのそれと重なり合うものである。[24] しかしプラトンとの関連はさておき,ほぼ同様の比喩は,同時代のアメリカ

の作家メルヴィルにも見られる。代表作『白鯨』(*Moby-Dick ; or, the Whale*, 1851)には，夜間に捕鯨船上で鯨油を取るため火を燃やす場面がある。その際鯨油の燃える火から発する人工の光と，朝の太陽の光とが，次のように，「虚偽の光（liars)」と「真実の光（true lamp)」として区別されるのである。したがってこの比喩を共通項とすることにより，同時代のもう一つの代表的作品を，断片的にではあれ直接学べることになる。

> Look not too long in the face of the fire, O man! Never dream with thy hand on the helm! Turn not thy back to the compass; accept the first hint of the hitching tiller; believe not the artificial fire, when its redness makes all things look ghastly. Tomorrow, in the natural sun, the skies will be bright; those who glared like devils in the forking flames, the morn will show in far other, at least gentler, relief; the glorious, golden, glad sun, the only true lamp — all others but liars! [25]

「天国鉄道」を読む際に，補助資料を活用しつつ何らかのかたちでぜひ触れておきたいと思われる部分は，およそ以上のようなところである。もちろんこれは，これですべてという性格のものではない。また触れ方にしても，時間的制約や履修性の実態等に応じて，多様なヴァリエーションがありうると思われる。時間的に余裕があるならば，上記の例の他にも，たとえば地獄谷で燃えている「悪魔的ガス(mephitic gas)」ということばから，「メフィストフェレス(Mephistopheles)」の話や，ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe,1749-1832)の作品『ファウスト』(*Faust*,1831) の話題へと発展させることも可能と思われる。また途中で訪れる「虚栄の市(*Vanity Fair*) 」の話と関連づけて，19世紀イギリスの作家サッカレー(William Makepeace Thackery,1811-63) の作品『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1848) について紹介することも可能である。あるいはさらに，旅の途中で出会う「原住民（native inhabitants)」を連想させる労働者の話から，『銀河鉄道の夜』に出てくる「インディアン」の話や，そこに見られるアメリカへの視点について言及することも可能ではないかと思われる。

いずれにしろ「天国鉄道」は，このような可能性を十分に内在させた作品である。

5 集約の資料

以上ような点に力点を置きつつ，読みの作業を進めるとする。最後に残るのは，読み終えたこの作品を，どのように読み取り，また文化や社会や歴史の中にどう位置づけるか，という問題である。演習の授業であれば，これは履修者それぞれの読みに基づき，ディスカッションを通して更に理解を深めていくというのがおそらく望ましいものである。しかし講義あるいは講読の授業においては，読みについての一般的，客観的な情報をまず提示しておくことが重要ではないか。履修者それぞれがそれぞれの読みを行うためには，基礎作業的なものとして，このような情報の提供がやはり必要と思われる。

このための資料として，次のような三つの資料（英文）を活用するというのはいかがであろうか。最初の例は，ホーソーン研究家ワゴナー（Hyatt H. Waggoner)が「天国鉄道」について論じたものの一部であり，次の例は，ポータブル版ホーソーン選集の編者である

カウリー (Malcolm Cowley) が，ホーソーン文学の特徴，とりわけその宗教的特質について述べたものである。そして，最後の例は，ホーソーンの隣人であったメルヴィルが，先輩作家ホーソーンの短編小説集『旧牧師館の苔』(*Mosses from an Old Manse,* 1846, "The Celestial Railroad" もこれに含まれている) を読んだ時の衝撃について記したものである。いずれも平易な文というわけではないが，補足説明を加えることにより，原文で十分に読める範囲のもと思われる。

① In "The Celestial Railroad," for example, his sympathies were with Bunyan, not with the modernists, and his characterization of Transcendentalism in that piece is certainly hostile as well as unfair. He agreed with Emerson and the other Transcendentalists on many matters, but he also disagreed with them on a few matters so important that they made all the difference. Much of his work could be described as a translation into romantic and psychological terms of those very parts of Spenser and Bunyan that Emerson was busy rejecting.[26]

② Out of his inner struggles and his sense of guilt, Hawthorne evolved a sort of theology that was personal to himself, but was at the same time deeply Christian and on most points orthodox. He believed in original sin,which consisted, so he thought, in the self-centeredness of each individual. He believed in predestination, as the Calvinists did; but at the same time he had a faith in the value of confession and absolution that sometimes brought him close to Roman Catholicism. He believed in his own unworthiness and in the universal brotherhood of men, based on their weakness before God. He believed in Providence, to which he submitted himself humbly, and he believed in a future life where the guilty would be punished, if only by self-knowledge of their sins. All these articles of faith he expressed, not philosophically — for he did not think in abstractions — but in terms of symbols as powerfully simple as those in *Pilgrim's Progress*, and closer to the modern mind.[27]

③ Certain it is, however, that this great power of blackness in him derives its force from its appeals to that Calvinistic sense of Innate Depravity and Original Sin, from whose visitations, in some shape or other, no deeply thinking mind is always and wholly free. For, in certain moods, no man can weigh this world, without throwing in something, somehow like Original Sin, to strike the uneven balance. At all events, perhaps no writer has ever wielded this terrific thought with greater terror than this same harmless Hawthorne.[28]

ワゴナーは，ホーソーンとバニヤン，エマソン，そしてスペンサー (Edmund Spenser,1552?- 99) との関係について述べている。しかしワゴナーの視点は，エマソンや超越主義者に対するホーソーンの立場を，「多くの点で意見を同じにしたが，いくつかの点で意見を異にした」ととらえるものである。エマソンが作品の中でパロディ化されてい

ることは先に見たが，ワゴナーのこのような見方は，作品「天国鉄道」と作者ホーソーンとの関係を考える上で，格好の話題を提供してくれるものと思われる。

思考の素材を提供してくれるという点では，カウリーのホーソーン論も同様である。カウリーの論は，ホーソーンの宗教性に焦点を当てたものである。カウリーの見るところ，ホーソーンのそれは，単純なものではなく，「彼はカルヴィン主義者のように運命予定説を信じたが，同時にまた告白や赦罪も信じたため，時にはローマ・カトリック的でもあった」というものである。このような両義性が，はたして「天国鉄道」と関わりを持つものであるのかどうかという点は，興味あるテーマである。

なおカウリーは，ホーソーンの思考方法についても触れ，ホーソーンは「抽象」思考ではなく「シンボル」で思考したという主旨のことを述べている。この場合カウリーのいう「シンボル」とは，「アレゴリー」と同義のものと思われるが（例としてカウリーはアレゴリーで書かれた『天路歴程』を挙げている），この問題は，上に見た文学形式の問題を復習するためのよい機会を提供してくれると思われる。

メルヴィルのホーソーン論は，ホーソーンの作品（『旧牧師館の苔』）に認められる「黒の力（power of blackness）」について述べたものである。メルヴィルが強い共感を覚えるこの「黒の力」とは，「カルヴィン主義者的な内的堕落と原罪の感覚」であるが，メルヴィルのいうこの「黒の力」は，アメリカ文学の一つの系譜を示す象徴的なことばとして今では研究者によってしばしば用いられているものである。[29] このような「黒の力」が，「天国鉄道」の場合はたして本当に見られるのかどうか，見られるとすればそれはどこか，といった問題は，読みの集約作業の課題として極めて魅力あるものである。

むすび

特定の文学作品を対象とした，講義形式による，講読中心の授業を想定する。その場合，その授業プランは，どのように構築すればよいであろうか。もちろん，各時間ごとの詳しいプランが立案できるならば，有効で中身の濃い講義を構築することが可能だろう。しかし，ある特定の作品を教材としてこれを構築しようとする場合，重要なのは，そのためのおよその設計図，およその見取り図を描くことだろう。対象とする作品が教材として利用する初めてのものである場合，特にその妥当性そのものを確認する必要がある。

本稿は，講読を主とする「特講」の教材としてのホーソーンの短編「天国鉄道」の可能性を探るものである。どのような講義ができ，どのような資料が利用でき，どのような発展性があるかについて，そのおよその輪郭を探るものである。この作品の場合，総体的に見て，教材としての可能性はかなり大であると思われる。とりわけこの作品は，テキストを通して多様なコンテキストの世界に触れるという点で，かなり魅力ある教材である。しかしこれは，利用の仕方，展開のさせ方に大きく依存するものであり、場合によっては、焦点の定まらない、拡散した講義を招来する危険性も内抱するものである。この点をどう整理し，どう統合していくかということが、次に問われるべき課題である。

注

1) 「1810年代からイギリスに若干遅れて現れはじめたアメリカの鉄道は，1830年にボルティモア・オハイオ鉄道で本格的建設を始めた。1840年には，東部および中部大西洋岸からイリノイ州の地域に広がった鉄道網は2800マイルに達し，すでに将来の鉄道王国を予想させた」(『アメリカを知る事典』，平凡社，302 頁)。

2) Malcolm Cowley (ed.), *The Portable Hawthorne*(Penguin Books, 1976), p.242.「天国鉄道」のテキストはこの版による。

3) Ibid., p.243.

4) "*The Pilgrim's Progress* Two part religious allegory by John Bunyan, at one time second only to the Bible in popularity" (*Merriam-Webter's Encyclopedia of Literature,* Merriam-Webster, 1995), p.883.

5)『銀河鉄道の夜』と「天国鉄道」および『天路歴程』との関連性はすでに指摘されている。内田朝雄「「銀河鉄道の夜」と「天路歴程」」(『私の宮澤賢治』，農山漁村文化協会，昭和56年) 167-81頁参照。なお賢治はメモ帳に "The Great Milky Way Rail Road" ということばを書き残している。『銀河鉄道の夜』の英語訳として記したものだろう。『校本宮澤賢治全集第12巻 (上)』13頁参照。

6) 軽便鉄道とは，1910年 (明治43年) 制定の「軽便鉄道法」に基づいて設置された鉄道で，主として民営で行われた。岩手軽便鉄道は，1913年 (大正 2年) 10月，花巻から土沢 (東和町) まで開通，翌年 4月には上郷 (遠野市) まで，1914年11月には仙人峠まで伸び，国有化の後，1950年(昭和25年) 釜石まで直通になった。『図説宮沢賢治』(上田哲 (他) 著，河出書房新社，76頁) 参照。なお『銀河鉄道の夜』の初期稿が書かれたのは，大正12年頃とされている。『私の宮澤賢治』 182頁参照。

7) "The Celestial Railroad," p.262.

8) 『宮沢賢治全集 7』(筑摩書房，1995) 249 頁。『銀河鉄道の夜』の本稿でのテキストはこの版による。

9) 同上，293 頁。

10) 同上，293 頁。

11) 「パリノウド」とは，述べてきた内容を結末のところで一転して取り消す叙述方法のことで，ヨーロッパ中世文学特有のもの。野島秀勝『ロマンス・悲劇・道化の死』(南雲堂，1977)18-20頁参照。

12) 『新潮世界文学辞典』(新潮社，1990)， 810-11 頁。

13) *The New Oxford School Bible* (Oxford University Press, Authorized Version), *Hebrews*: XI, 13-16.

14) 「ヘブル人への手紙」(『聖書』，日本聖書協会，1955) 11章13-6節。

15) Dante Aligieri, *The Divine Comedy*(Penguin Books, 1984, trans. Mark Musa), Vol.I, pp.67-68.

16) "The Celestial Railroad," p.242.

17) Ibid.

18) Cf. *Merriam-Webster's Encyclopedia of Literature*(Merriam-Webster, 1995).

19) "The Celestial Railroad," p.252-3.

20) John Bunyan, *The Pilgrim's Progress* (Penguin Books, 1987), p. 35.

21) 『銀河鉄道の夜』, 254頁。

22) 同上, 290 頁。

23) "The Celestial Railroad," pp.249-50.

24) 「洞窟の比喩」とは, プラトンの『国家』で語られている話で, 奥深い洞窟の奥で, 手足と首を縛られ, ともし火の照らしだす映像だけを見ている仲間の一人が, たまたまそのいましめを解かれ, 太陽の照らす世界をみ, 再び洞窟の中へ戻って, 仲間に影だけを見ているのだと説得しても, だれからも信用してもらえず, 無理に仲間を連れ出そうとすれば, 殺されかねない, という話。『プラトン全集巻11』(岩波書店, 1975) 514-5 頁参照。

25) Herman Melville, *Moby-Dick; or, the Whale* (Northwestern-Newberry Edition, 1988), Chapter 96, p.424.

26) Hyatt Wagonner, *Hawthorne; A Critical Study* (Harvard University Press, 1963), p.17.

27) Malcolm Cowley, "Editor's Introduction," *The Portable Hawthorne,* pp.12-3.

28) Herman Melville, "Hawthorne and His Mosses," *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860* (Northwestern-Newberry Edition, 1987), p.243.

29) Cf. Harry Levin, *The Power of Blackness* (Alfred A. Knopf, Inc., 1958).